

北っ子 敷島北小学校だより

令和7年9月1日 文責 学校長 増坪広夫

2学期が始まりました

8月29日（金）の朝、学校には38日間の夏休みを終え、一段とたくましくなった子供たちが元気よく登校してきました。きらきらとした笑顔で久しぶりに会った友達と話をしている姿を見かけ、楽しく充実した夏休みであったことが伺えました。その夏休み中ですが、特に大きなケガや交通事故といった連絡は一つもありませんでした。夏休み中の御家庭での指導に感謝いたします。



新学期のスタートでは、各クラスで子供たちは「2学期のめあて」や「がんばりたいこと」を、みんなの前で発表したり教室に掲示したりします。目標やめあては学校生活に限ったものではありませんが、新学期を1つの節目として「こんなことが出来るようになりたい」といったように何かワクワクするような目標が立てられることを期待しています。

また、学校はたくさんの友だちと過ごしているわけですから、クラスみんなで力を合わせなければ達成できない目標もよいと思います。クラスの一人だけが頑張れば達成できてしまうものではなく、クラスみんなが力を合わせて初めて「うまくいった」と思えるような目標をクラスみんなで共有してほしいです。

進んで重い荷物が持てる人

8月23日（土）にPTA 早朝作業が行われました。学校の敷地内の草取りなどを中心に環境整備を行いましたが、貴重な休日の早朝に、たくさんの親子の皆さんに参加していただき感謝いたします。お陰様で学校環境がきれいになり運動会にむけての準備が整いました。



終わりの会で話をさせていただいたことですが、こうした奉仕作業のようなボランティア活動に参加される人は「**進んで重い荷物が持てる人**」だと思います。

私が大学生時代に野外活動研究会のお手伝いでキャンプに参加したことがありました。このキャンプは幼稚園生を夏と冬にキャンプにつれていくという大きな行事で、私を含めた学生が現役の幼稚園・保育所の先生とともに「キャンプカウンセラー」として子供たちのお世話をしました。その最終日に真っ黒に日焼けした年長さんの子供たちに向かって保育園の先生が言ったのがこの言葉でした。



「重い荷物と軽い荷物があった時に、すすんで重い荷物が持てる人になってください。」

わずか5・6才の子に向けられた言葉ですが、強く印象に残りました。おもえばキャンプの道具を運ぶとき、学生だった私たちの前には「小さめの軽い道具」しか残ってなかったような気がします。日本人の根っこの部分を見たようで深く心にささる一言でした。

豊かな心の育成 SOSの出しやすい環境に

山梨県の教育振興基本計画の中には「未来を生きる子供に必要な力を育む教育の推進」など4つの目標が示されています。それに付随して「豊かな心の育成」における「いじめ対応」などについて重点的に取り組むべき指針が細かく示されています。その中には「SOSを出しやすく相談しやすい環境づくり」というものもあります。背景には子供を取り巻く環境が大きく変化する中で、困ったことがあっても「助けて」が言えない、SOSが出せない子供が多く存在するだろうという考え方に基づいて設定されています。



堅苦しい言葉におきかえると「援助希求的態度の育成」だそうですが、心の危機への対処方法として他者に援助を求めることの重要性を知ったり、友人の危機に気付いた時の対応方法等を学んだりします。こうしたことは子供同士のトラブルを解決する中で自然に学んでいくこともありますが、「困ったことがあったら自分の口で伝える」といったことは、どの家でも普段から話されていることかと思います。学校も同様です。

私が「さすがだな」と思う教師は誰一人として授業中に「分かりましたね」と念を押すような言い方はしません。「よくわからない人はいますか」「困ったことがありますか」と子供に投げかけます。そして安心して自分の困りごとや失敗を話せる雰囲気とその学級につくりあげていくのです。

大人であれ子供であれ「救いの手を差し伸べる」ことよりも「救いの声を発する」ことの方が難しいような気がします。体調不良時の訴えに限ったことではありませんがSOSが上手に出せる子供の育成にどうぞ、ご協力ください。

全国学力・学習状況調査

今年の4月17日(木)に全国一斉で「全国学力・学習状況調査」が実施されました。対象は6年生で、学力調査に係る教科は「国語・算数・理科」の3教科です。この全国学力・学習状況調査は、文部科学省が日本全国の小中学校の最高学年(小学6年生、中学3年生)全員を対象として学力・学習状況の調査を目的として行う学力調査で、理科については3年ぶりの実施となっています。またこの調査は、学力を問うだけでなく児童生徒の学習環境や生活環境のアンケート調査も行います。



山梨県の結果については新聞報道等で「小学校では平均正答率が小学校6年の国語と算数で全国平均を下回る」と報告されていますが、県教育委員会は「全国とおおむね同等の結果」とし「基本的な用語の意味がわからなかったり、計算の仕組みが理解できなかったりする回答が多く、個別の知識を多角的に関連づけて考える設問に課題が見られた」と回答しています。

全体的にいえることは、わからない問題があったときに「無回答」であるケースがとても高いということです。普段の授業の様子でも「難しそうと感じたときにやることをあきらめてしまう」「間違えることをいやがる」ことが多いように感じます。よく「まちがいが」「失敗」は良くないことだと思われがちですが、実はそこには「新しい発見」や「気づき」があり、その経験から多くの事を学ぶことが多いものです。「あきらめてしまう」「間違いを恐れる」ことからは何も生まれないので、何かしら「自分なりの答え」が書けるようになることを期待したいところです。 ※本校の結果は学校HPにアップを予定しています。